開卷驚奇俠客傳

第二集

弐

へ13
3157
7

常五

開卷驚奇俠客傳第二集巻之二

東都　曲亭主人編次

第十二回　義烈を感ずる俠民身首を斂む　霊夢多を説く　聞人墓表を建つ

復説巡礼庚吉ら。初て実父と認るの孝順の切なる。耳死山も頷くべく。山梔花も物いふ況や五常と具足して世の萬物の灵たる。人衣石のあくまれ。子の母の間と今を知る恩愛情状憂歎悲泣の死苦を忘れ。目四郎は忽然と。頭を指て且庚吉と左見右見て。原来孺子の音問を産せ。這身れ猶でありけり。親とのたん自伏るか。這年来の俺らの豫徴も。やっぱり。和郎が養父の武士ぶり。六稔以来母と侶の迴国せんか什麼ぞ所以を。浮世の餘波の昕まず。露寒の涙を呑ぶ庚吉の。ら。孕ふ目を憔悴して。俺身の養父の楫取老母介朝彩

と吸れる。微禄なれども新田の譜第勝屋少将に仕まつる。船田殿の殿兵衛最初新田の城に在り。時生育まつりしぶうえに前妻身まかりたりければ母君の俺身と携へ那後妻ふるのあと年歴て後まつり知りぬ。任而今まくに程もなく右少将の俱まつる。陸奥の国府に年と累ね義隆奥と落ぬとても。なほ伴はむとて武蔵相模に有けるに此度俺身に母君と共伯ふる。上野に送られる。任而九年前つ夏義隆殺れ此度俺身に母君と共伯ふる。上野に送られる。任而九年前つ夏義隆殺れ此度俺身に母君と共伯ふる。厚木に。御旅亭に留置れて。這底食いねて。もられ。絶ぬ。近臣五名とのみ従へ。御運の微るに。這里にて亡さぬ。厚木にかば。咸散々に落亡なる。家中に俺父々の世に従へる。欲せば。俺に微職の武夫なれども。世に当家に仕まつりて。君恩元浅くして。然ると本処に留措れて。末期のあん伴せまつりに送感ふ。上ぶ。今に是非に及ぶ。切て殉腹極所て五家臣達と異ふる。世に忠信の志と果まんのとあり。決め事情と任ると寫に送りたの

夜女童に伏ふ。風の便りに聞けり。母君の歎れ然ぞあり。俺身七才の夏人ければ。憂とのみ。明暮と三稔と歴る。春の季より時疫流行て。母君親族父多々の氏族。大々に。憑む樹陰のあらばなりたる。当年母君の寛ぬ。俺身命と捧げて。老母介主に添ひ。才に一稔許に。峯上偏て山雑の一所に棲び年と歴て。俟田非文もなくなりより。有繋に憑む弟兄に所親も送ぬ。死亡に憂ま活残りに。過世の業報竭ぬ。後の世に心のとる。這里に餓と等んより。亡君亡父の菩提の與に霊山灵地と巡れ。仏の冥助と願へ。如右なるに。告示されに。逆旅の准備に杖と笠の外に東西なる親と子ら則に里と五五にて。七百幾百里坂東西四六十餘人所の観世音と拝まなり。なほも詣に廿五所の灵場城うち巡る。既に六稔に及ぶ。今茲に親姑峯に到て亡君と吊ひ。厚木に杖と曳て。亡夫の墓に詣んとのれに共伯に。ち踰本に這山路に。

御の病着既に危く見えし折俺身を枕方に召近着て今まで具に告ざりしが依は実の
爹々あらず其の敵ハ箇様々々と我身の身を告知され親子の證据に贈られし遺子
牌の事ぞ血のつながりし頭陀袋と樒物と牌と遺すのみ。親の歎ハ後の身の母
只一人子一人なる。旅宿ハ心細さに俺身さらバ誰とか所縁に浮世を渡りかせん切て
廿にもならなバ牛にも馬にも踏も下ぞ。十五といへど年不足なる季子々誕辰せ小胆見憂ふ熟
てなほ又いくばくの劬労なるべし。痛しや実の爹々いかと手をくよの身持すくて家を喪ひ徃
方も知ざるなりし死と程歴て傳へ聞しかど然とても鬼ならぬ人の心のならくバその名告も遇バ
親子の断ども絶れぬ母の恩愛よも看殺しにはせまじけれバ舊里なれバ假名川へ立向バ
所在の知れもせん尋よかしとの遺言されし母ハの身の道すがら料らズ環の會ならず親子の
宿因短宵の明るを等ぬ死別れ轍の鮒の水を喪ひ峯の猿の樹に離るも俺歎き
亦よりも倍さり悲しさと声立て腸を断孝子の哀傷せるに狗堪ゑ目四郎も涙坐に

吒て原来和郎の養育親ハ脇屋殿の内人船田主の郎兵衛なりし欲這方ざるぞ右
少将家の公達をはしませバ則和郎の御主君に養実二親の志を継て忠義を盡
さねかし。さても〳〵と云うに舌も剛すし必死の苦に勤められぐら廃吉ハ小六に對ひ額をつきて。
世が世であらバ家目通りもえきるまじきのなれども親の忠義を恩食て使せ給ひたる有がた
からんと小六を感涙に目をきバたき領きて貧賤憂苦に人となりても物はじめの日ごろ部
なかぬ才器の程もいと愛たき孝子の哀傷査しき俺年来の志願を遂て窠家藤白
安同們を徳餘波なく數を果せしハ汝の実父目四郎の窠内の幇助に依て今よりして何処
なれ倶しく苦樂と共にせんぞと必も似ざ惴すし自殺ハ本意ならし料ざも今に
その子どるなる人一善に進むと云へバ則一善の果報あり又一悪を行ふと云へバ則一悪の業報
あり譬ば環の輪るが如し。悪を去り善に與して其義の為に死して悔ざる目四郎の終
焉にぞの落淯の孝子に値遇して後あることを知る歟びハ陰徳陽報行悳を造化の精

巧。一大奇事。神出鬼没といふまくのを。啓よや目四郎。今よりして。這庶吉が俺伴當是迄とも
おりに做して。久後まで。看届人是を末期の心ぞうに成佛せよと宣諭に。深く情に親子の
欲び目四郎が血に流る。左の隻手を推抗て。戦れつ幾遍狭小六を拝し嬉しに心
寛にて忽地に絶えんとせし氣を激して。眼を睜る声細ふに。憶有かれ一期の世相親
衆目を欺く與に死して栄ある小官人の。身代りに死天の旅子が又二世の忠臣と做も登
らん逆旅のあん伴那世這世と身ひとつにて。憑なる後児がうへ安れども。吾思安ら
ば俺死ざる美事に腹を斬らばもあれ。居ヨヨの敵を殺盡せし。本支に相応しかぞとて。
後に凝ずめあらんとい必とも朽をや。武士ぶるに刃が悍くとも刃尖オに二寸突立てる心後
れて。必ひの隨に引続きも。泣ずも泣ずで半生死の容佳らぬ俺ぞ。矢傷野猪にも劣りた
る長物かるに天を明るん是まで。と右の拳に左を揃てキリと腹一文字に掻斬に程に。
熱と潰る鮮血と共に大腸小腸顕れ出く。勿地変る面の色も今を浮世に別れの一呼吸

堪ぬ堪ぬ庶吉が涙に心乱れ竹のよと泣つ泣し沈む哀傷さてと。小六が引接南無阿弥
陀佛みざ仏と唱る六字四苦八苦七ツが過て向明の鐘鎬々と鳴渉る。彼誰時に生滅の已
寂滅為樂と目四郎が刃を接て吭頭を掻んとして両三番突外しつ。やう庶吉に吭管掻
斬てで俯うけ。登時小六が身を起して。やと庶吉哀別に泣堪ぎ歎ぶに這天と明さば。
目四郎が死が画餅と形そ。身も亦倶に捕へ。路次の備に一刀を分捕して快立の記念の
牌に合敏め狭東西に送れそと賛せば庶吉やう涙を拭めて刃を起つて那這る戸
骸の頭に送散る刀を一口合抗て這亡骸が那腹黒鬼右衛門そ。ひとに小六を
かりて原来其奴が這頭に在りて。鄙に目四郎が敵と知らぎして。敵の一刀
快敵に因果覿面恁そあり。快這方へと先に立て。又庭門より出んとする六人
下雨降てで。笠明空六人が間から。ふせまと。這縁類の片隅に哀と立とコヲ
くあり。あを安同の若堂黒が。翌五氣賀かの準備に是究竟と庶吉に合も出

さて共侶ふその蓑を被ぶ仕度を引提て主僕のそく出ぬ。小六ぶ既ふ一丈のまう先ふ
找ー左右の樹蔭ふ忍ひけ泉人のそ癖者ぶと喚称る尖ぶ声ふ見く白ふ斫んと
せーと笠投着て身を倫せー小六ぶ修練い信那足を罩れて輾ぶと深透き抜撃ふ。
一人の首を撃ち落ーて返き刀ふ又一人を起ーて立ち丁と斫る窮所の深痍ふ苦と叫ぶて。
仆る身遠く庶吉ハ走近つた驚ぶ忽ぶ浮跚ぶ忽ぶと声よりも早く小六を透ーたく。
庶吉其奴ダ十々滅を刺ね這们の外ふ外面ふ後ーー敵へよもあーー。と云間ふ庶吉ハ武抗
たー条十々滅の一大刀ぶーて往方ハ足柄越を京師のくふと共侶ふ潜ぶ路なぶ路ふ。
ふけ入る山ハ雨霰降ても袖ハ露ぶ蓑虫の父の横死と亡母ふ有明ぶ燭ふ落て
ゆくを思ふ俱ーそぶ泣ける原ふ庭前ふ。小六を拄えて撃れる一個ハ安同ぶ奴隷ぶ長ふ。
龍巻耳朶ハと喚做もの又一個ハ庶介と喚做る。安同ぶ馬の鑣奴ハ這们ハ殊ふ酒を
嗜て醉臥ふハ醒るまで死人ふ等ぶ酒癖ふ。壁ハ那劉丘石ぶ一千日の醉ふ似ふ

まぶ者の故ふ身の務の為ふ用ふるるのあるーふ。主の刃ふ倶ふ数番ふ。ふ日屬ふ倶ふ
禁酒ーとをく慎ふたりけれども。主の安同ぶ湯治ー果て氣賀かの前祝ふ今宵ふ酒
宴あるーと耳朶ハ毎ー吟知りて侍る折ふ俺ひふ。喫ふ生甲斐ふ似ふ。夜ハ奉
公の為ふ身ふ甲夜過てふ喫べれと母思ふーふ酒餚ふ窃ふて准備ふ整
ハ却同病ふ相憐む庶介ふその身の子舎ふ招ふ寄せ密ふ意ふ示ーふ他ふ敵ふ献ふ
酬れつふ。ふの隨ふ醉ふられ。ふ俱ふ睡臥て。主の安同ぶ撃ふれーと知ーふ。その暁ふ耳朶
ハふ内逼りけ例ふ快く眠ふ覚ー浄ふ。そふ起ふ折大変ふ初て知て酷く驚ふ。
かふく覗ふ約莫這浴館ふ在ふ有る主ふ家隷ふ皆ふ撃ふ果されて殘ふ。その多と
庶介ふ仇ハ既ふ立退けふ。ふ中ふ痍ふ肩ふ。退難ふ。一両名百戸ふ在ふ。
ふ。その声ふ聞ふ。覗ふ。窃歩ふ。故ふ処ふ。却庶介ふ。弐番ふ。
ふ。侍ふ。件ふ異変ふ報知ふ庶介ふ亦驚ふ。相譚ハ耳朶ハ悉妾

時沈吟して。主従送々く殺されしは只俺們のみ悉もるを。酔臥てたと知るまでとも聽ず。
ぐるぐるまわり。逃るをめつと疑まで。縛頸て刎られん然いとそ這依れ逐電あて間々。
身を暗くして一生涯世間狭く暮べし所詮出処は埋伏して面亭の賊の退く折不意に
起て討捕らば。俺と和主の功名大然とそい後難るく面と起きのまるくで官府沙汰も
冥かるん。這義い奈何と其くと厩介听て一説に及ぶ然ば准備をまられそ。身装して刃を引
提て又那這と覗ふに庭のくまるる縁頬の雨戸外れてありければ原来賊い這里より入るるるも
庭門を潜べと俱に其辺領えて竊に庭を立出て。両て樹蔭に凌ぐ。今々と待るを小
六を知るまで度吉に先きをそとも庭門よりぬんと出つると耳朶八と厩介と声と合して左右より
殺んと找て。計策い圖に當れども。技鈍られば合期せば這那俱に小六に殺れて人にも知
られまるるに。佳れば耳朶八厩介ぐ相謀ひたるけ。趣い小六とい人ぐ目足と知れば況安同が
黨い這時通て命と隕して。後に伝るるを程経て耳朶八が女房は良人の枉死と

うち歎て。降巫の元絃に降せ折緯徒々と詳に報るるよりの件のよりを。絶へ悟るもあり
けるとぞ。されども耳朶八。その宵の仇を小六と知らで殺されめるれば。降巫の招にを
這我を降らざるを是後話に看官宜く査べし。程に底倉の邑長るを。げ安同が氣
賀の宿所に立還るを。猛可に竹を。昨宵夫役を宛られまれば石異屋の主人と俱に土
民幾名欽駈催して。荷駝と牽せ竹輿と吊せ。天明時候浴館る所門前に伺
候して。門戸の開くを待るに。ける日はを高く升るまで。寂寞として音もせざれば大家
齊一評りて。怪しまで門戸を敲けども。絶て応のるるを。凝然の胸安らぐ。故に邑
長い石異屋と連立て外面を那這とを。遠らに。硯に庭門の戸の開て。
閼相に樹下に。村で斫られて仆るるを。人あり。何と驚馬騒て。先夫役
們に報知せ。大家裡面に找て入るを。相れば。憩や安同い主僕并に数を畫く。身
異に。鮮血に塗れて骸の間毎々に異に又奥と面亭の間に腹掻斫て俯

這本文見第十四回

たのもしき世のとろろ市虎
底倉風聳著演
竊探虚實
うたれみけりといふるまろとろ

肖像第十七

なるあり。相ふ御内の人々ども仇なるべしと。精きるのを後ふ安同の臥房る隔亮ふ寫送
また。數行の文字をえ出して。昨宵藤白主従の恁名殘なく殺れい助則とふ猛者
脇屋義隆の兄與ふ舊記怨を雪めんと初て越ふ悟るのを。然而在るべきあらばれ。
邑長い石見豆屋の主人と倶ふ安同が氣賀の宿所ふ赴て。緯恁々と許け。然ば藤
白の従類いひひけ。凶変ふ一家の周章沸が如く。老黨若黨一騎駈ふまく底倉ふ
聚来て亡骸を撿ら。衆議を凝らして那這と部を定め。或い汗馬ふ鞭を鳴らし。鎌倉ふ
赴たてよと。管領家ふ呼えあげ。或い輕兵を従へ。仇の餘類を索るもあり。又氣賀へ走
還り。安同の妻長総ふ底倉の為体。并ふ老黨ども衆議の趣を具ふ注進あるも
有けり。左右する程ふその次の日。鎌倉管領氏の執事上杉憲定入道の沙汰として。滿
新八平時高。撿屍使を奉り。伴當ども従へて底倉る浴館ふ來着あり。且ども
亡骸を甲乙と撿し。果て。安同の兄黨并ふ邑長ども禀きよりと曲々ふ問糾せば。安同主

従の殺られるその宵のあを知るめ者れい衆口総て分明ふ。自殺ある一個の仇を是
則逆黨ふ。そ助則と唱ひ。義隆の舊臣るべ。あれども單身を恁居
ヨメる敵を殺ふ。果さんるあるべうもあらば。願ふ助大刀の支黨ども。速ふ退散をさ。狡
其頭の咫驗ふ。そ緊ふ質問れかども。大家知ふ。るれいとぞうふあて。云甲斐
ふ。倘這一個の仇のを。數を盡て殺られる。安同主従の不覚言語同断。今戰四の
武士ふ似げ。狗死とうつべ。さぞれ主僕の亡骸い。汝達宜く執斂て後の御沙汰を待ね。
又助則い賊徒を。當所ふ梟首を。餘党を懲ふ。厳ふ宣撰て却時高い鎌
倉ふ帰府の馬蹄を。小程ふ安同が横死の風聲隠れなく。藤澤ふ伝へ者
演竊ふ是と訝りみづ。巷ふ立出て。そのようとうち聞く。安同主従二十餘名ふ。夜原
助則とふ猛者ふ血をせられる為体い恁々。那助則い義隆主の舊臣ふ。七歳つる。年
齢い二十許歳。桃花面相。蒼鬢あり。箇様々々の打扮を。美事ふ腹を所るが。藤白

殿の臥房を隔て亮に淡墨あり。これにより復雖言の事情の知られしとぞ。ときに親しく来つる人ら傳へて実説とぞ奇談を誇るのさまありけり。その言大同小異あれども約ち里の戸毎に額を集め耳を傾け譚ふとうちゆくこと這噂のごとけれ。著演らく疑ひて。左さる右さるにつき世に同名の人まうれども安同主僕と殺さるるの譚と小六がみづから撰ぶ名のみ名と名のみ名と同じもいと奇なり又その人の面貌と年齢と問考るに目四郎さよく似る非隠ぶ名とのみとも小六と既に古人に亦又面貌と年齢と似るとも目四郎が小六の譚と知ぶくもあらぶ知ぶ七假名の暗合をるるあれども。目四郎ゐどが本事ゐそ。二十餘名の大敵を殺す果せるあべやい憶ふに件の助則の実に世の人の猜せ如く。脇屋殿の舊臣ゐえ。そを誰ゐもあらぶあれ單身に七古君の與ふその仇二十餘名を屠ふせ武勇忠誠今昔獨歩の英雄俺不幸にして七侍る人に交ぜるるぶ。新男家臣と侍れ。空谷跫音思こまり。加之安同小六が與ふる父の雖言俺身ゆゑ亦怨と結ぶ。害せんとのゑ計較る。

りのあるを料ゐも殺す果れい未見の死友俺身に熟ても義俠とのん恁れば俺亦その首級を莽ぶあるべらぶ要ゑをあれと尋思とつ。その宵妻の晩稲ふのゑ意衷の機密を耳ゑ示し七。次の日の朝未明に獨甘門より出て出ぶ。奴婢們に知らで宵宿所に帰りと呉ゆ。却説野上著演に笠深く載ぶく。底倉を投て赴く程に日の長ければ路次をいそぐ既に七黄昏時侯より。底倉の里に来て梟る首級と尋るふけいと第三百ふ這山里の申明亭に尚これありと聞て。躯て其祭赴く程に日に暮果て烏夜叉ども其里に夜を成る土民們が高張燈を點し建て火を焼くのさまありけれ。其選數間四方に月の宵よりも明かりけり。著演これに便を得て梟る首級と熟視るに噫這首級に今ゆらに疑べくもあらぶりける目四郎ゐどよりち驚れて瞬もせず雖相ゐ些も差錯ゐけり。倘戍人の怒に俺と怪むとりやと呉べ久く歩を駐め其頭と過る如に走退ぶ七又鵠立て肚裏に思ふ。那目四郎に小六が旅宿の伴とせんとて俺に約せ

あれども。小六が横死にその義を果さゞれバ。そを朽さずして。命を棄て安同们を殺し果しく
自殺をあらけん。這推量に差ハざれバ。他一旦の恩義を感じて竟に俺身に係るべき枉難を刈拂
ひしそれ共へども。その迷黒に源助則と署せしするそうろねその助則ハ小六が諱他がみ门から
撰ミしを俺ならず知ず死後に及びて金を包ミし惜字紙の中より初て見出しくるけるまで。全く目四
郎ハ知る故知ざるを小六が諱を署して孝義を他に譲らんや。這等ハ凡夫の了簡に及びざ
かゝる大奇事あるに目四郎ハその素生親ハ假名川の逆旅主人也。那身ハ無頼の博徒なら
抜ぬ熟ハ云ずとも武藝勇悍千万人に挺れしものゆへおく美かし。然るを只その身獨ぞ。二十餘
兇名の大敵を鏖にあくりしハ奇中の奇事といふべし。凡慮の及ぶ所にあらず。その縁る所を復推
量るに郷尚ハ本意をとげ遂もして世を早うせし小六の亡魂那目四郎に賞縁て実父の讐
怨を雪め且俺與にも仇を倒して未然の利害を除きしものゝ欲倘全る鬼祐徴りせバ目四
郎あらバが本事ゆるぞハくにしてよく徹らんや。小六が冥火の濡たれバこそ目四郎ハ知るよしもなき助

則とぬ諱を那迷黒に署せしあらん。徒孜合されバ初の疑心氷解して思ひ半に過ぐるに
做ら。今まるまでも目四郎ハ当初安同に密事を憑れたるものなれバ藤白の若黨が訝りて
るもあるけんに公们ハ迷て殺されし欲今に至て助則の目四郎なるを知るものなきハ亦一奇と
いふべくのミ。俺も初ハ這義を悟らざりしハその孤忠を感ずる隨に。いまで首級を合せ斂めて葬
らんと思ひて潜びて這里に来まけるに。思ひよらぬ郭に疎鹵也。既に目四郎なりけるを方纔
面前よ見るからハ身を空くして還らんや明日那首級を合せ節して葬らるゝ折に拾ん欲策して
今宵奪ん欲ひつらにまべしと胸よのミ思ひ難く惆然と只自ら去らん程在りけるに程に忽地
後方の樹林の間に。八四五名聚合来て。密談の声しそけれバ。著演驚きて且評の窃歩
してく其邊に稍近着て窃ぎバ他们ハ地方の庄客なるらんぞ。一人の耳くなう。九个年以前
その地方を藤白殿に賜りて領知せられしより以来年貢ハ故例に倍し讀債られてのミ
なし。村に課役ハ間なく時なく宛られて耕作の便着を喪ふと負さりといへバ又一個の伙家が

ちまぶとよそのゆるれ今番の湯治遊興ゆ民の歎に城ゆられば温泉ゆ生活做さの。坐
来て啖ひ五十日困窮至極ゆるるのこ旅客聚合ゆざりーゆ誰とて泣ゆゆるゆ紀とのゆ
又一個の伏家ゆ患い俺里のこゆゆゆ山より東の農戸れ藤白殿ゆ爪を剥されゆ身の
膏脂さゆ這年来採竭されゆゆゆゆゆゆ主の横死い没怪の幸ゆ世の鄙語疫鬼
の亡仇と報ふとゆよゆも是笛の情由であるけんか。とゆゆ大家笑坪ゆ入て。あれゆ就ても集
首せられ。助則と孩ゆ猛者ゆ這一郷の城隍ゆ那人ゆ新男の餘類脇屋殿のあん為ゆ
命を捨て大敵と鈔ゆゆる大義精忠世の人通て蒼ゆゆ。因て今より密談して。那亡
骸と葬るべ。と俺もゆゆ人もゆゆ這頭へゆちも聚合へゆ梟首ゆけまで三日ゆ及ゆ明日ゆ
首級をこゆ乗られゆその折竊ゆ軀ゆも共ゆ柩ゆちゆ斂めて。里の寺院へ送るべ。とゆを一
人ゆ推禁めて。不日葬るゆよゆけれども。同近寺ゆ這ゆ那方ざるゆ襲着られて。出害其
ゆ首ゆ起るべ。とゆゆ大家有理と応てゆゆゆゆ左せん欲とゆ。商量果ゆゆゆゆ。

一個の伏家ゆ沈吟ゆ。這里ゆ那里と揮んゆゆ。藤澤ゆる遊行寺ゆ舁ゆこゆて葬
らゆ。路の程迥ゆゆ。後々までも後安けん且那首ゆゆ福良長者と。吸れゆゆ郷士ゆ。
義の與ゆ財ゆ惜まゆ人の難義ゆ救せゆゆ。廣大無量の慈悲功徳の風声這里
ゆも少ゆゆ。遊行寺ゆ那香華院ゆれゆ。戦死の髑髏一萬許ゆ拾集めて葬ゆゆ。
それのゆゆゆゆ施主絶たる。石塔ゆ月々ゆ樒ゆる向水ゆ沃ゆ盂蘭盆毎ゆ仏們の與ゆ布
施ゆて菩提ゆ吊ひゆゆその慈悲ゆゆ枯骨ゆ及ゆて合ゆ除るゆ死墓碑石塔ゆ歴然
とゆてゆゆゆゆ。藤澤人の噂ゆゆ。恁れゆ明日那助則の首級ゆ窮ゆ遊行寺ゆ舁
ゆて恁ゆと憑ゆゆ。葬らゆ福良長者の知らゆ。後々までも縁亡ゆ
と。俱ゆ香華ゆ手向らゆゆ。這説ゆ甚麽ゆ耳ゆゆ。大家聞々感心ゆゆゆゆゆ
精妙ゆ介らゆ明日桶柩ゆ首級ゆ軀ゆ窮ゆ斂て暮るゆ等て抬ゆ通宵走ゆ
ゆゆ。暁ゆゆゆ那寺ゆ前ゆ到るゆ。伏家ゆゆ死ゆ漏易ゆ。這一段計ゆ古人ゆゆゆゆ

術與と錯を合と迭ふ諜一合せり。余程ふ著演い料らぞ件の密談と送をるく听
果て。清ぞふ退ぞ。更ふ心ちなりふ。善ふ與ーと悪と憚るい通ての人の心ぞれども那
里人們が這地の主の死と欲ぶて。親ーるぶ。目四郎と憐むい是使と乗の所行ふーく。
安同が年来の貪墨邪怪を知るふ足れ。ぞれば今宵俺ふと下ぞ首級と隠ぞふ
及べーぶ。那里人們が相謀ふ隨意俺が華院へ送らせて。後ふ俺亦施主ふりて。目
四郎の菩提と吊ぶ。世ふ知るるとあぶぞ。後々までも安ら居べ。吁ふと肚裏ふ分
別ぞく決りけり。這時暮て程もなければ著演い底倉ぞ。急要あれば藤澤の衍村へ
ぞく旅客とふい誘へ々轎夫と央ふて足とヨく取せ件の竹輿ふち乗りぞその通宵
走せければ天ぞまぶ明ぞ。藤澤ある宿所近く乗着け。登時著演い藤澤の里人
処ぞ。竹輿ふるぞく立ぞて轎夫們を還ー遣。宿所の背門ふ立在て人を喚ぶ戸鈴
開ると。等得て奥ふ赴ければ出る折も還り折も知るめ絶てるりけり。然而著演い

妻の晩稲ふ底倉の為体。及目四郎が支の趣箇様々々と耳元ふ示せば。晩稲ふ听ち
胸と浅ーぞ。且感涙の進むを覚ぞ。小六がるぞ。この時ま
でも貪眠て母の傍ふ臥ふ。奴婢介も目と覚ーけ。件の綜の趣の末とのそうちゆく。
いまぶ初と知るぶれば身と起ーる母ふ對ひて。根据り葉と欲ふ問ーぶ著演い隠ぞ由
るく。躯て件の趣と耳元ふーロと林ぞて。あるーと見ぞめよ。漏ーぞと戒めるふ。ぞれば
約莫江湖上ふ目四郎が義死せーと知るるめい野上親子三名の外いのぞあぶ。況小六が
陽殁ぞ。亡父の怨と雪ありうい神ぞ反身の悟るふ由るく。歎元い越ふ弥倍ふ。感而野
上著演いるぞいふーあるとて。這日遊行寺ふ参詣けり。大檀那のるれば住持の
上人ぞ俱ふ方丈ふ招入れて。ぞく對面あるのい程ふ看茶の礼既ふ訖ぞ。四表ハ表ハ品
次ふ著演い住持ふ對て。慈禀さぶ何と申ーん浮ぞる言ふ似れども。昨宵甘太郎夢を
ぞふ。壁言ぶ全身鮮血ふ染ふ。一個の勇士忽然と。枕方ふ立て告るぞ。俺いある夜横

死のあと底倉人の幇助ふよりて。明日遊行寺ふ送葬せる。願ふい和殿施主ふるく。
菩提を吊ひゆひなかーとふ欲と云へば駭覚ゆ夢ハ五臓の疲労ゆ。憑ひふ足らぬ
わぐ。ふひけ形奇夢ゑ。ちも措れを稟きの。這支果ゑ応験ある。けふ倘柩ゑ
當蘭若ふ送り来るるれあーべ法慮ふ稱いふーありとても。その安葬ゑ允させの異
日ふ官公その餘ゆ口説の外より與ることあるべ某総て身ふ引受て左も右も計へ。
這芙を憑心稟さん與ふ拜謁と請ひまるーゑとふ住持ハ異説もるくいるる趣ち
ろるる。滅済い出家の所役況剣難横死のの兵名。済度へ弥陀の本願ゑりーはるるの
あるるーべ宜く葬りるさまべーと早ふ美引のーべ。著演斜るーべ欲びて。ーべ明日又
参詣ゑ夢の當ゑと知らまく欲ゆ。その折見参ゆべられとて告別まて退出ふ。左右
ゆる程ふその次の日ふるりーかべ著演い准備の布施物ゑ伴當ふ廂ゑ又遊行寺ふ
赴けり。登時住持の上人ハゑく著演ふ對面ーてきのふ施主の告られる灵夢ゆ果

ゑく応験ある。今朝未明ふ底倉ゑる。柩ゑ早めて送り来るる。里人们一火あり。その仁兵
義名湯礼作智六信ゑとう唤做ゆ五名ゑ寺門を敲ゆて願ふ。ゑるる罪人の亡骸
ゑれども稀ゑる義士ゑ。ハ俺们竊ふ相謀て當院の五ふ做まく欲ゆ。ゑるで葬りるゑとふ
けり。ふるて先役僧ゑ。綽の仔細ゑ問ゆ。件の戸骸ハ昨夜底倉ゑる浴館ゆ。
藤白隼人主従ゑ名残ゑく殺ゑる果ゑ。故主の怨ゑ雪めくる。暢屋義隆の餘類ゆ。
當坐ふ自殺ゑるーゑ管領家の下知ふ依て皇首ゑ吾ふ及びーよりゑ。詳ゑふ
けり。當下愚僧ゑ。ハ常変死の亡骸ゑとも容易執措ゑるふ況や是ハ管領
家の寵臣主僕ゑヨメく害ゑ。梟首せられーのゑか。非除那首の里人们ゑ忠義を
感ゑて葬るゑも近ゑ道場ふ送らぎーゑ。遥々ゑ俺寺ゑ葬らんゑ欲ゑるハ故ゑ。
ゑかるる。倘這支世ふゆゑゑ。官府沙汰ふ及びるゑ。その禍ゑ俺寺ふ移さんゑその所ふるる
ゑゑ。ゑふけれゑ速ふ允ゑまゑ。ゑるれども。昨日施主の霊夢ゑとのし涌れるゑさへれハ枉て

柩を留措して那里人们を還したり。されどもいまだ葬らざるときく施主の詰来るよしもなきを。なほ
と潜かに報のふを著演つら〳〵うち聞て。疑ひ小あるところあれども鳥首二百日の後なりしかバなほ後
難ひぬ底倉人们が里を隔て。柩を當院に寄るハ上人の不二法徳を仰ぎまつれる故なる。
某既に那義士の灵魂に漏れるを果さずハ倒に出泉を免るゝかなしめ好もあらも著演がありん
限りハ毫ずつも御寺に難義を係まうらじ。必ず葬りあらかしと請求ると切なりければ住
持の上人黙止に由なく。その意に任しおひけり。當下著演欲びて躬て納所の老僧を招つ
よしを告て即便義士の葬式料七々の讀経料大衆へ布施の銀子まで目録に合して遁
与へけり。あれども日のある程ハ。その憚なきにあらずとの黄昏に葬るべしとて且葬式の準備あり。
著演主僕ゆハ茶を薦め夕餐を羞めなどして。姑且時を移す程に既に黄昏になりし
かバ道人们ハ鐘を鳴らして。衆徒を本堂に聚合しめ。沐浴小舎に容措しくる那義士れ
桶柩を拾出して本堂なる。弥陀の御前に舁居けり。亡者ハ鳥首の密葬ゆゑ。覩する影もなき

柩なれども。施主ハ當山の大檀那なる。著演が財を捨て住執りに葬式なれバ讀經の大衆
二十口。住持ハ引導の偈句を唱へて。更に法坐を占めれバ。鉦を鳴らし木魚を敲く追薦の
法則叮寧に綷果し折著演ハ道人们を指揮して。件の柩を小六が墓の傍に深く瘞
め殯を締せるなどして。更闌て宿所に還りぬ。這日の伴に立るハ。字六と亀七なりしかバ事情を
知らざれバ又是老爺が事を好みて。施主なき亡者の施主になりそ可惜銭を費すよと哉樂し
げなりえあふて竊にあざみ笑ひたり。是よりして著演ハ目四郎が七々の忌日毎に寺に詣て。
擔ぞを向をとらふとるく。その卒尭忌に墓石を建て。義士目郎之墓と云六大字を勒しけり。
介程に底倉の里人仁兵義右衛門ハ礼作智六信三们ハ。いぬる夜義士の柩を舁て遊行寺に
赴きし折住持の早くも允しゝかバ。回答數回に及びしを。辛く〳〵に乞訴へ。一貫文の鑢銭を与へ
桶柩を役僧に遁與して躬て逃るが似く。走りて底倉にかへりし後ハ。ぬれて亡がらく死霊ハ大かたけれ
ど。心に係りし所かあらねバ折々噂をするのみ。夏ハ過て秋もなかば。八九月にならし時候。仁兵衛云々

来りて鎌倉に赴くるかさを遊行寺に立寄て那義士の墓に詣でけん墳墓とも覩たりと必ひて。墓所に至りて那這と見る所に石塔と相互をに館某之墓と勒したる。墓の傍に尚新たく磨立つる墓碑あり。義士目郎之墓と勒したるは是歟と猜しとるやうく相ふる左右に誌せし歳月は忘永十八年四月廿四日とあり。されば是なり。智六が逆のこと簡差つぶさに那福良長者刀祢の稍字知て施しる石碑を建まのひかけ。とゆのれく當面に寺僧に問ひさしたるそ。仮底倉に帰る。然而義右衛礼作智六信五這四名のこと恁恁と件のことを報知れば大家本意あるとふ覚て現仁兵の猜ぜしそ。その新墓を福良長者の建るひよ疑ひる。然ば墓表に助則と鐫着られ世に憚りて窃に斟酌せられるん小るを又目郎とは是甚る意ぞ。猛者は眼の細くて皆圓るるられば大目子とは義者あらんと宿鶴に訴け。素ふより這里人们共に貪賊なるるーに恁る陰徳あれば。一家児ふ病人稀老。各々児子多くあり左も右も表て世を渡る飯と言ひ

まど饑を凍を倶に上壽を保ちしとぞ。ぞを是後の話。這五俠民なる。是より下は話語る。

第十四回　足柄踰ふ長総奸夫と伴ふ　吉野山ふ小六女仙ふ遇ふ

話表換変侯三浦介時高は次の日鎌倉に帰着ぞ。執事憲定入道に底倉に為体并ふ安同の老嘗邑長們を質問の綜の趣且賊徒助則と梟首のまを箇様なと具に演述あたりける。因て憲定入道は件の綜の趣を管領家氏へ申上げて更ふ又眞ふ也ようあり。躰て安同が氣質の從類ふ嚴命の旨を伝へ。是非の憲断あるん折まを一人も分散せで。仇と慎を処べとふ下行状を遣はけ。小後鎌倉の営中ふ。執事誣定衆うち聚會る。藤白隼人安同の横死の是非を詮議あり。登時上杉右衛門佐氏憲が先ふ申けるは。安同が那首の不覚は今ぢく論議ふ及ばるる。その身主從二十餘名一個の敵ふ敷る果されん婦幼ふ異るらぬ。倘亦敵ふ助大刀ありて。ぞを一人も

數を留めりゝ亦是不覚とらひつべ。左も右も武士なるの。風上も置く能はぬ這
義と以その罪を定らるべきのものあゝんと憚る氣色もなく論ぜゝば。執事憲定の
子なるけ。安房守憲基も共侶ゐ膝を找めて。恁のまゝ安同ゐの年来私欲
ヨクより。陽ゐ倹素を支とあれと。陰ゐ驕奢を旨とて。貪れども飽くを知らず。
民を虐げる。奸曲死後ゐ發覚れて。これをのふりの勘ゝ。然ばこれゐ母ゝ比他湯治の
暇を賜り。久ゝく底倉ゐ逗留の程游女を携乃酒宴ゐ耽り。金盤伏家ゐ金銀を
造りたゝもヨヌくあり。その臥房ゐ錦繡を列ね。庖厨ゐ玉を炊き。桂を薪ゐあらよう。
今番三浦介が目數あり。既ゐその罪えあり。恁る贓罪あるのゝ縱横死の不覚ゐ
ゝくとも。何でゝ免るゝ方あゝんや。ゝゝ采邑を召放ち。そが妻子家僕們を退散せ
られんゐ。法曹至要ゐ明文あり。何等の疑ひぞと言爽ゐ說たりければ。評定故老の甲
乙も。敢又異說ゐ及ばず。下官們も豫より思ひざるゐあゝねども。那安同ゐ御先代より出

頭の罷臣なれゐ。上の賢慮ゐ憚りて。懲ゐその罪を定めゝひゐ。然るを佐殿房州の宣ゐ
趣公論と。誰ゝ感服せざるべき。俺們とても。その餘ゐあゝべ。御同意ゐそひられと異口同音
応へゝゝ。執事憲定入道ゝゝ。衆說の一決律文の旨ゐ稱ふゝ珍重ゐ。他を重用
ゐ。ひゝ上のゐ。僻支のゝゝゐ。愚老も亦安同を通御用ゐ立のゝとゝひけゐ。便佞
利口ゐ惑される衍ゐる。現盗臣ゐ一箇の利のゝ。這聚斂の臣の如ゐ民を虐げ妻孥流
ゐて。その害億兆ゐ及ぶりゝ。他ゝ横死ゐ公私の幸ひゐ。快ゐ諾ひけり。恁而憲
定入道ゐ評定衆と共侶ゐ件の衆說の趣を管領家ゐ。安同ゐ罪過のゐ。
恁々と言ひ。持氏ゐ直と示れて。俺ゐつやゝ思ひけり。他ゝ奸曲言語同断。又
その横死の為体。寔ゐ沙汰の限りゝ。然ば汝達の定め。如く當ゐその罪ゐ行べ。自
餘のゐ恁々と嚴ゐ命せゝる。憲定これを奉りて。即便三浦介時高と。又氣賀ゐ遣
ゐて。安同ゐ采邑ゐ居ゝゝ。年来貪貯る。金銀家伏を籍て。皆悉没官せゝれ。妻子

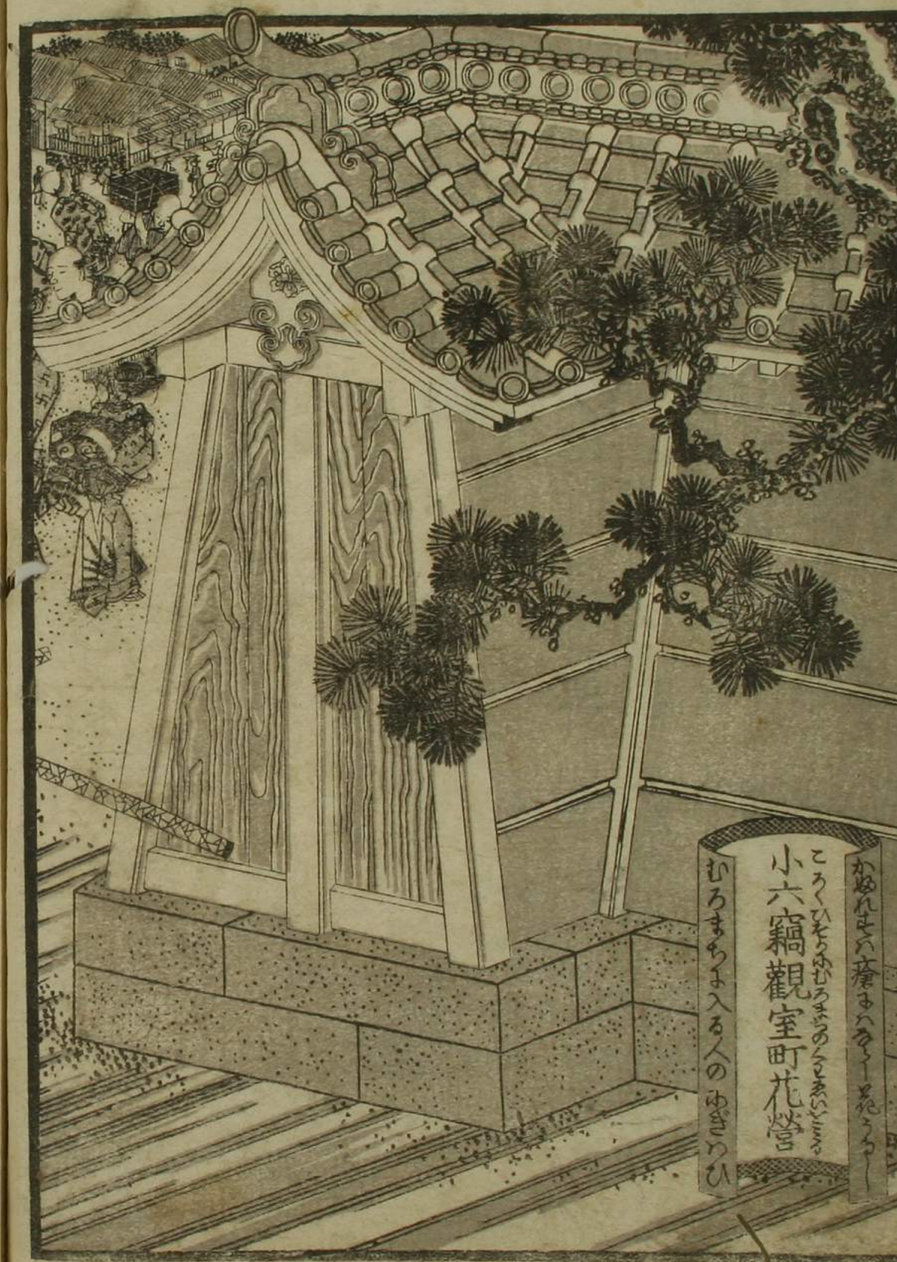
并ふ従類ハ送るく本地へ家れけり。然ハ安同ハ老黨若黨雑色奴隷ふ至るまで那宵底倉ふあらぶ七。死と免れる歎ハ又堂ふと反ぎて。禄と喪ひ家と逐れて。私財雑具を金ふ出せども。近頭の里人も荘客も皆憎むの。些も憐むのなけれ。そ顔け惜く家いあらぶ。見くハ途ふうち垂涎で。只嬉の子と散ぎ如く。絶の由縁と求めて。皆ハ方へ離散ぎて往へ方も知ぎるりふけり。そが中ふ安同の妻長総ハ原是相模と甲斐の封疆る丹澤の荘官某甲の女見ハ十稔許前ハ比二親ハ身まるふ。家督の兄も世と早うまで。今ハ侄の世ふれど。舊里ふれハその家の庇ふ寓るべ。元ふるるふ長総ハ素ふ密夫ありそハ藤白の家の若黨ふ。衿笠小夜二郎と嘆做ものと。長総ハ這年来そあ良人安同ふ壁妾も居寵あり。荒淫強酒るりけると。喫酢くふ。べ禁むべ。元ふ祖るる隙ふ邪念起りそ。卒然ふ俺も亦道と守て。阿容々々と生涯巣成ふせられんとり。要とあれと尋思とるる。此彼と竊ふ擇むふ。近習の侍者小夜二郎ハ初安同の龍陽るりふ。安介ふ寵と奪れ。賸年も長れ。額髪と刺除ぎて。近習の列ふ侍るる。狂ふ。そ人とるる。男子態美く。且管絃の技ふど。大抵ハ習得る。婦女子ふ孝順るるけれ。長総此と密通と早晩樂と取ることるる。恁れハ安同の敷られ折ふ夫婦の情義敦くぞ。悲泣の涙ハ外視のと。内心ふと小夜二郎と男妾ふせまくふ。忍憚ることるりける。樂とふ。そ央ぎて。猛可ふ離別の哀とあり。當下長総ふ。丹澤ハ俺親里るれども既ふ世と棄ふて。侄の家叔ふるりるふ。叔母るれ。とく寓居る時刑餘の人ぞと貶められて。東態の憑ふかぞハ進退其首ふ谷りと。後ふ悔ふとあ。ん所詮他郷へ赴くとも。幸ふと俺貯禄の間銀のまるふ俺愛郎と共伴ふ浮世と渡らぶ樂ふかりて。然いとく。転て小夜二郎ふ縛恁ると密談ふ。猛可ふ逆旅の准備と整へ。両三個の老黨ふのを。小夜二郎ふて親里へ赴くとふ。勢ふ附ふ栄利と料り。主従るれ。今ハ這折ふ主の安尼と。ふ。其身々々の損益ふ執も逆上て。とく従ふんとふのるる。長総ハ倒ふ没怪の幸と。思言も外ふ。俺ふ年れ

十あまり三ッも四ッも弟なりける小夜二郎と久後らけて夫婦まなりんと契だる人より先に出てゆく今を初の旅衣俺所天なりぬ菅笠と投て往方ハ定めねども京師のかたを心當にゆくよ宿りにはく杖もちくくに踰る足柄の足に信して辿りけり話分両頭爾程に錦小六助則ハいぬる日の暁ぐれに揖取庚吉を従へて足柄山にのぼりけり登り都路遠く赴く程に人迹絶たる山路を血に染る衣裳をバ谷河にて洗浄め身甲となる鎧臑盾と庚吉が被なる禅衣ハ皆その流水に推沈めて跡を埋め形を窶し却も行随に雨に猿と風に流る旅宿の憂苦をものとも思ひそ憂愛る所ハ養父のうへに禍あれと念ずるのミ約莫一旬許にして平安京に来りけれバ二条大橋の頭なる歇店に宿りを投めて夏果るまで這里にとどまり畏に南北両朝廷の和睦ましより京師ハ方僅も長閑にて前将軍義満公ハいぬる応永十六年に薨りたまひて二稔になりぬ今ハ足利四世将軍義持の治世にて賞罰訓正しからねども故老の家臣ヨヌく補佐して先代の武威餘りあれバ叛くものハ立地に伏誅して風波起らず四民殷

まし家業を興してなりしかバいつまでも太平の國安かれと祈りける然バ小六ハ世を潜ぶ身の這里も外視の厭しければ額髪を剃り成人になりて名を隠し氏を更め舘に易るに遑をもて遂小六と唱るのミ又助則とふ名を告らぞある時ハ赤関とも唱へて出生の地を表したり是よりその名漸々に江湖上に高く聞えく世に游侠を数るものハ小六を以巨擘としたなる是後の事にして世の人あまざ知ざりける閑話休題却説小六ハ這留の程日毎々々に庚吉をゐて洛中洛外這那となく名所故迹を歴覧して地理を考へ人氣を測る真情に胸に満て野花山月も樂しからバ嵯峨なる太上天皇（南朝の後亀山天皇）も東宮にて渡らせあひし小倉宮も恙なく御座ましし聞えしかども東路なる京師の憚の関ヨリれバ今苟且にもひ立て訪なるべきよしもあらバ左右する程にはや三伏の夏過て京の北なる白河の秋風たつ時候になりけり登時小六ハ案ずらう由なき京師に旅宿を累て只足利家の富貴を觀て迷恨に歳月を焦せるハ鳴呼俺ながら鄰の宝を數るに似て益なし今より大和に赴

有像家中
ちゝ吉
小六

華玉堂印發


かぬれまハ着まハ〜見うう〜
こゝくひそうふむろまのくるまいどこゝろ
小六竊觀室町花營
むろまちよ入る人のゆきゝひ

して吉野山なる先帝の山陵を拝をなし。那首の舊跡古戦場を弔ふべけれと尋思をしつゝ。遂に京師を立去りて又大和路に遊歴し。後醍醐天皇の宮陵ハ吉野の山の奥かとよ。如意輪寺の御堂の背に御座ましけりと。豫て聞しかバ。嵯々たる高峯に攀登るに虔吉も亦年来逆旅に熟ゐる甲斐ありて後に跟ひ倶に扶さて那宮陵に詣て是狹とだろ了相なれバ主僕且懐舊の涙ひとしく叱をする人間栄枯得失の理を辟言れバ杪に匂ひ春の花峰に彩る秋の楓孰かその根に皈らざるべき。現夢の世の夢なれや。貴き賤き推並て盛なる者必衰ふ世に這生を禀たるもの。誰か這死を免るべき。然しも十善の君として天日嗣知召し御位の最も正可に三種の神器を傳へたまひて六合曲もなく治させたまふ。愛たき大御威徳にも任しあらで枉津日ありて尊氏てふ賊臣の暴逆に江湖上復安からで舊都の御住ひ克ハせたまはで這行宮に年闌て竟に崩御ましけるぞ。その御迹を弔まつれバ青塚苔滑にして石泉纖々と流れ白楊早謝して落葉離々と乱れたり。延元四年（是年興国と改元）八月十六日

這君崩ましし比一上達部（一云侍從藤房）の這陵を今なほ忘れ果ざりしにやと思ひいでゝとまるゐ月かげと詠たりしも思へバ今なほ一日の如し。悲たるかなといへバかの傳音を偲て小六ハ宝前に跪居して合掌默禱時移るまで意衷の所願を訴まども応るものは野禽の声峰の松風音添て凄愴にぞ弥増ける。是より又後村上天皇の宮陵を拝をなし後亀山天皇の行宮の趾ハ何くぞ諸司百官の宅地見るに就ても只断腸の媒となることのみぞ多かりける。却山中の神社佛閣鳥路熊徑の幽なるを尋ね雑乃蹟を傳ひて迭々巡礼果ぬれバ東に又林麓に下りて或ハ笠木の山に登り或ハ南將の古城を尋ねて約ハ大和十五郡を隈なく歷覧せし程に秋ハ盡て冬もはや十一月中浣になりにけり。登時小六ハ又思ふやう。倚身幸なく生る日の遅かりけれバ南朝の奉為に一臂の力を盡ことなしといへども切て一年三个月先帝の御廟を衛りて勤仕の微忠を表べし。下年ハまかりになりたるに何処に春を迎んやとて遂に吉野に山籠して敢又麓に下らず。蔵王

堂寺の坊舎なり。空寮を僦賃て姑且其里に宿とす。後醍醐并ふ後村上の宮陵ふ参詣して。御垣を拂ひ香華を献るふ庶吉もよくこれふ仕へて割笹を馳ひ谷水を汲るごとき雪の朝雨の夕も主僕の忠誠辛苦を厭ず那ふ詣這ふ参て日取歩行ふ程ふ今茲ハ暮て応永も十あまり九ッと云ふ春二月の時候ふ至りけり。徒り一程ふ有一日庶吉ハ些の恙ありければ小六のみ快立ち行く例の如く後醍醐の宮陵ふ参仕へ。且山塵埃を極拂ひ然而水を汲み榕を献り姑且祈念まうる程ふ忽然と一く南の岑ふ琴の調の響えけり。怪し那方ハ山又山のみ人の住む所るなふ何ゆゑぞんと思ひて。念ド果て退く折心ともなくそこれが藹蘭る一個の了髪の何の程ふ後ふ立て。莞爾ふ小六ふ對て刀祢ハ脇屋右少将の郎君ふてとこそ申れ俺神仙嬢のわれて来と宜へて。笑て那首れ在ものを卒這方へ先ふ立て去向も告ず伴ひけり。小六ふ問く訝りて。あら狐狸などの所為ぞ。と思ふのみ推辞ふ由なく引る隨ふ恍忽として。跡ふ跟く路の程その幾十町るほを記えず。西くと既ふ迥ふして。こそれが品石の異なり立て五十尋あまりなるべくんと思ふなる頂上ふ單肩なる一個の女仙琴を膝ふ立て乗して。端然として趺坐まる。身長ふ餘る黒髪ハ肩より撫て匂ふる。桃花の辰月臥蛍の眉玉よりも清白る。肌膚衣徹る綾羅の袂ハ翻飜として天津五岳郎の舞樂ふ降らむ花ふも似る。金敞き那身の光明ハ赫奕大として蟾蜍ふ火兎の殿裏ふ遊び月りと思る。五彩の瑞雲腰を遶りて。身ハ中天ふ在る如く。三十二相具足して。神仙なりと知るふ足れり。こだるふして其が頭ふ近着て路ハる。甚麼まるやと思ふ程ふ白雲油然と足下ふ起りて。凝りて階梯ふ成りしなり小六を誘引て。梯を踏陟るふ些も危ふとも。女仙の身邊ふ赴ける。登時件の髪ハ跪ふ女仙ふ對ひて。小六を俱して。報て側ふ侍るなる。小六も共ふ打ち瞻仰て。跪坐て氣色を伺ハ女仙ハ琴撥遣て眼を開て小六ふ對て。善哉勇士。近く找ふ。阿郎ハ忠孝世ふ抜れて。文武兼備の才長る。薄命ふして。志を伸る所なり。然

ぞ鹿獨なる戦馬の間に生れて親に別れ君を喪ひ遂にその身を異姓に寓して稍人と
成ることを得たり。依而其頭の厄縄て男子四方の志を果さんとするに及びて先當山なる
先帝の宮陵に仕へまつれる丹精貫きたりといへども後醍醐天皇の大御霊は這所に陟しま
さず今より七十有三年前に秋天皇崩御ありし比賊徒退治の御執着あれば御霊を亡
失させ給はず節に死したる文武の諸臣の冤魂を召聚へて這里は舊都へ程遠ければ御
本意を遂させ給ふに便なきをいかゞはせん。依りて叡慮を旋らし給ふに亀山の仙洞に行幸を
做し給はんとて宝輦に御して出させ給へば百官前後に従ひまつり伶人は楽を奏しつ。那
里へ遷御做しまゐらせしと。當時侍従忠房と京師の夢想法師の夢に正司に入つる
ことありけり。忠房これを筆記して遺忘に備へたりけれども秘して人にいはでありければ今なほ這
義を知るもの稀なり。然れば先帝の大御霊は這御吉野の山に在さず。然ると香華をまゐらす
せて仕へまつるは益なき所行なるの義を阿郎に知せんとて窃に招きよせ給ひしと玉音妙に告げら

は。小六は奇異の思ひを做して額つきたりける頭を擡げ。仰られけるは然ば今より何
処を投て立出てよからんや。又南北両帝の御誓約ませし如く。小倉宮は當今の東宮に
立給ひて。御世を知召べき欲去の義も示し給ひしか。と問を女仙うち听て阿郎は這里に
要なきよし今知りて速に立も去まくほりすとも又料ざる障りぞ來て清明の時候に及ぶ
べし。偶這地に春を迎へて開くべき花を等て還んは。遺憾なるまれば。急らで自然に儘せ
よかし。却時を過て下山に及で。神風の伊勢に遊び給へ。那首は南将残燼の北畠氏國司なり。
勢に附き世に遵ひて。憑しきあるじとも見ひらけなく故人にあらん。又小倉宮のおんうへは這
御世知召べき。御前約ありといへども。義満義持胸狭く。只南朝の皇胤を絶まゐらす
せんとのみ思ふ。皇國の治乱に遠慮せず。驕慢不信を旨として執政なるままなれば。
いふともきべからず。その天のまだ定らで人天に勝つ折なれば阿郎们が純孝孤忠も徒事に
なるに似たり。後の惑ひを解べき輿に輪回の理りを示さん。欲抑後醍醐天皇のおん過

世と考へられば則是天武天皇の後身をとつまけ。又北朝なる光明帝へ當時天武天皇と御位を爭ひて亡されぬひぬる大友天皇の後身と過世の御果報畫ざりければ最初後醍醐天皇へ北條高時入道が御位ふ即れまりこる。持明院殿新・厳と推退け建武ふ回復まりくれども。程もなく尊氏が暴虐ふりて世間乱れ尊氏又光厳のあん弟光明帝と執立まりて。武威と華夏ふ振ひ。遂ふ後醍醐天皇へ吉野ふ潛幸まりくく。南北朝とうれぬひ。是より以降五十餘年諸國ふ蝸角の戰へ絶ず南朝へ御二世歳累ひて三種の神器と偽へぬべ文官武臣忠義の毎家と忘れ命と擲ち後意ふ一統の御世ふ做まく欲せーかども。時運至らぬ西餅とまり。今へ北朝御一統の天御世と言はせぬふ。前世ふ天武天皇の吉野の宮より潛幸て大友と討滅ーぬひ。輪回ふよりて今生ふ。後醍醐天皇と生出ぬひて那大友の後身る光明帝のあん為ふ呉竹の世を陳めぐを吉野の宮ふたり霧の雫ふ怨と慰難て。竟ふ崩御ぬひ。在昔天武と大友の御位

爭ひ原是天智天皇の虚讓名聞と好ませぬひ。皇子大友のあり形。そを白王太子ふ立ぬひて皇太弟天武とて東宮ふ做まりーぬひ。悄々地ふ嫌忌の禍と避ぬん為大友ふ位を讓り祝あらぬりーと天武のもをく猜ーぬひ。髮長七。吉野の山ふ世と不樂ぬひ。ちも御本意ふあーられば御隱謀やとーまりけん大友れちろ安らぬ左大臣蘇我赤兄右大臣中臣金们と相計て亡ぬまりーもと欲ふ王へるそ。その克既ふ急とれば天武へ吉野と潛ぬて近江路ふ大友と天下併一の戰ひあり。大友竟ふ戰敗れて陣中ふ亡ぬひ。金へ斬られ赤兄へ謫されぬ殘黨咸伏誅まて天武御位ふ即ぬひ。大和州淨見原ふ宮造て世と御知三十五年這朝より白鳳朱鳥の年號と建立させぬひ。姓と八種ふ定めぬひ。そを中宗と稱まりる。聰明睿智の聖王なれども只御一代のみふ。七崩御の後天武の皇后讃良皇女女帝と做て天下と知食ふ。則是天智の白王女大友のあん女弟持統天皇ぬとーまりぬ。天武ふ本

義詮の和訓本文記ハ[illegible]リと也又一説ハ[illegible]と也義教義昭の子孫[illegible]れば同訓[illegible]実ハ[illegible]リ

い意と遂ぬとも。御一代ハ又大友の。ゑ女弟ゑ持統天皇御位ハ即此のひーゑ是その本末あるハ似うの。辟言ハ北朝の光明帝ハ尊氏ハ立られて。御本意と遂ぬひーかども。観応二年ハ足利義詮ゑ南朝の後村上天皇を迎まうて。姑且降参まうる時北朝の光厳光明崇光の三帝ハ吉野ハ合まうれぬひーゑ。義詮又崇光帝の御同母弟ゑ北朝の君ハ做ーまゑ。せゑ。後光厳帝即是之恁而義満の時より後々ハ持明院殿の御嫡流崇光院の御子孫のみ正統ハまうーせぬうん。然ば當初。後醍醐天皇と御位を爭ひぬひー光明帝の只御一代まうーゑ。在昔天武天皇の御一代まうーゑ如ー扨又尊氏直義の前身ハ在昔大友天皇ハ薦めて天武天皇を亡ひまうらせんと謀りまうる。金赤兄であるければ今生ゑも大友の御後身まうる光明帝ハ仕へ。素懐を遂まうるゑの。宅南北両朝ハ名あ[illegible]文官武将ハ前世ハ或ハ大友ハ仕へ或ハ天武を幇助まうーー百官の。栢業ハよりゑ今生ゑも又敵躬方とまうける欲是も亦知るべうらん。然ば天武ゑ大友ゑ又南朝ゑ北朝を順逆

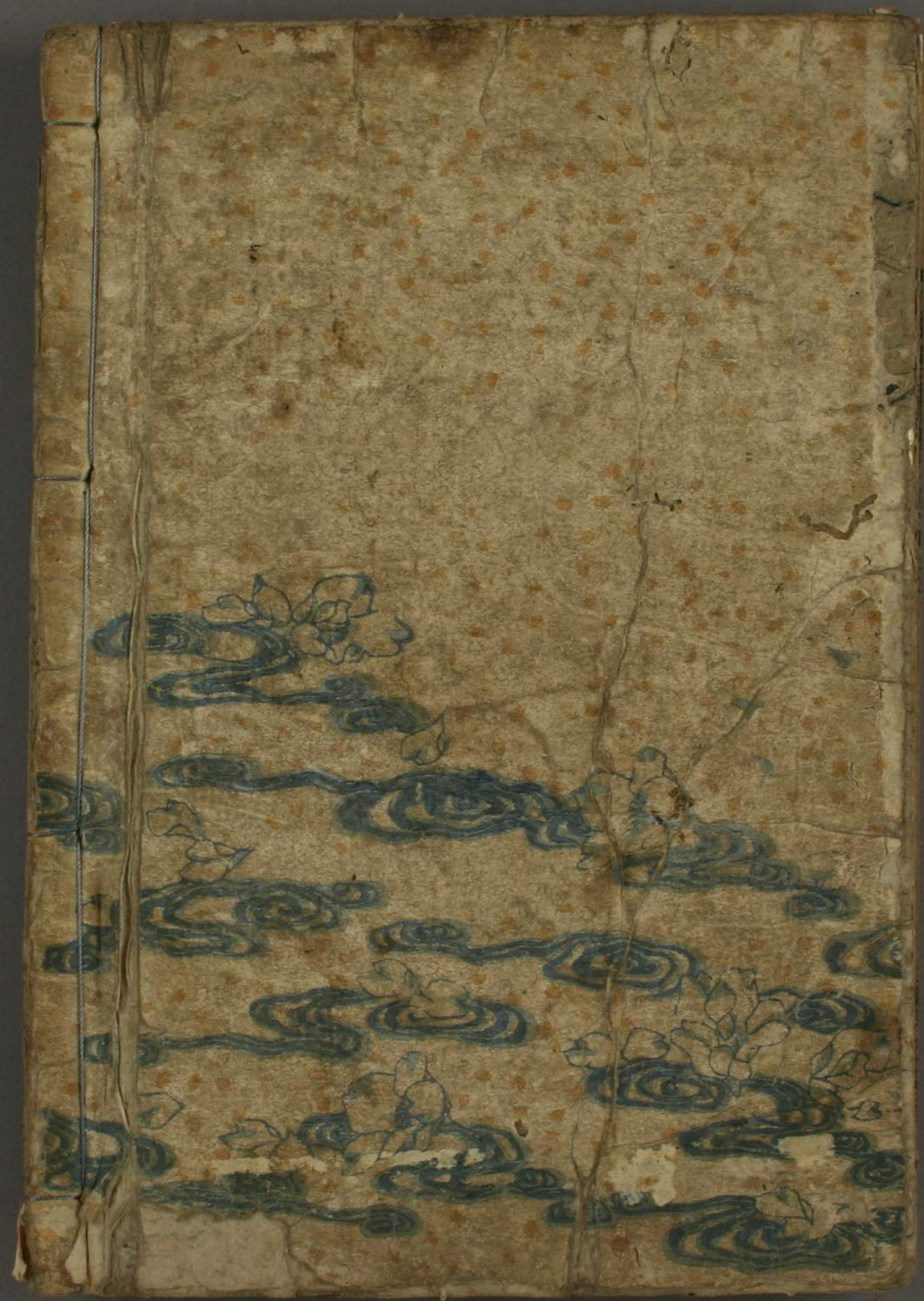
そのあるのみ。皆是天照皇太神の御子孫ゆくとうーまうべ。その得失ハ皇祖の神れ。神慮の係る所まうる。孰を是とー孰を非とせん。畢竟ハ這風雲の。會ハ乗じて栄利を謀りー。猥鴟枭害の大悪物の。虎威を借り。時運を汲て世を擾乱ーたりけるゑ皇祖の神も今速ハ攘鎮めぬんゑの。克ハせぬうゑ。人ヨリければ天ハ勝つ。時運と天命ハ我ー知るのハ天をも恨ーまゑ人をも怨めまゑ。世ハ忠信の狗とまうるも。乱離の人ハなーーーとのゑ。念ゑて英ゑ氣と養ハべ。輪回ハ佛の説く所。賢とまうく不肖とまうく。料ばりける横難ハ遇ると過世の業とハ。忠臣孝子の不幸まうる。義士貞女の落命まうる。皆是過世の業報とハふとゑ。ハ雖言ハ報ハ恩とのそける心起らん。然ばとて吏の不祥ハ遇ハ毎ハ這ハ輪回まうー。那も亦業報ゑと生悟りまうく。君父の為ハ怨を雪めゑ。その身の仇を思ハまうら。形の武士ハ似まうとも。その行ひハ出家ハ同ー。恁てハ五常を蔑如ーゑ。蒙々まうるゑ未視の雛狗児ハ異まうまゑ。抑亦悲ーかまゑ。然るゑ今愁ハ輪回の説ハ憑るのハ後醍醐天皇と

君ませ
被了髻長掖小六渡雲梯
仙姿美女
小六
有像第十九

神仙娘

光明帝と各々その御子孫の正統を争る義の論ぜり。理と示すもの又那道義法師の
説の如く南北朝と立られて麻のごとく乱れる。六十餘州を討治め大功あるに似れども
驕恣にして君臣の礼義を思はず。不信不実の性あれば善政罕なり。虐令ヨリこの故に
六十餘歳まで有つべき命数なりしに帝星その算を奪ふて五十一年の程にて是則天
誅なり。応報なりとぞ。是等の意味は姑麽姫に對面の折なれば然而詳に知るべ
あらんと。いぶかしとは是まで快々宿所に退りぬが。と促し又諄返す。宏論奇辯に耳を傾け
小六は只頑感服して。示教の趣肝胆に銘じて義知つまりの分る事も人欲神欲
君の素生の知まゝ。又姑麽姫と宣せしも何人なるや。猜しかなり。這義も示させ給
ひしと問ふに女仙いなまあぢ不古と。俺身は這山中に又河内なる高峰中に遊び年を
歴るのみ。素より名もなく氏もなし。又姑麽姫のゆかりも阿郎と宿縁あるめるのみを
今具に告ぎたるこれも亦遐なるぞ。思ひ合せるよりわれん天機を漏れ西妻とぞと諭

ぬく。躯く側なる瑠璃の壺の蓋掩遣りて。才に三粒の仙丹を含ませ紙に拾りて
小六に贈りて。やよ男士なく這里へ招れしかども毫だにも歓待あらぬよりてこれをもあら
ず。一粒いまの処に。服して效を試みる。残る二粒は後々に必用る所あらん奴等閑
にするなかれと諭せば小六も受載て。その一粒を吃下せば香氣忽地馥郁と口中に
充牌胃に走りて。快然として清々しく。氣力日属に十倍して思慮を増し智慧を
富し。是より二日を経るまで食ざれども饑ざりけり。恁而小六は神女仙に教ひを
舒別れを報げ又髪を送られて。復那雲の階梯を渡りて程なく髪を
後方より忽地に声をかけて。孜よや刀祢東方に山峡を亦閉せえや初桜の開ぬ。と
ふに小六は遽しく。ふと驚んとせし程にもあらぬ。悍然として歩を失ひ雲の階梯中絶く
身を倒に千尋の谷へ陥りぬと思ひしは是假寐の夢にて。先帝の宮陵を拜まず
ぬ。俄に額つき臥て在りければ駭覚て身を起し。情然として心を定めて那這と又思ふ。

眼ゐ遮るのみ。夢欲と忘へ口中ゐ茶の香氣ゐ不絶せぞ残るる二粒も懐ゐ在り原来那
仙嬢の幻ゐ又ゑく過去未来を説示ーあひーと噫有るる。慚愧ーと獨語身を轉ーて
其方の高峰を數回伏拜を默禱ーて歇舍ゐいそぐ春の日の山静ゐーて那這と霞段空
引時候ゐぐる。途果敢とて黄昏ゐ宿所ゐ辿り着く相れば庚吉ハ病苦ゐ嘆ぜく衣
うち被ぜく臥ーるーと。ゐる甚麽と驚ぜて。喚覚ーて容子を問へば今朝ハ ゐ
ぎりーゐ。午より寒熱往来ーて。口さへ乾ぜて堪ぎとのひけり。よりて小六ゐ柴折焼て白粥を
煮沸ーるどゐ。准備の前茶のゐ共ゐ薦めて親切ゐ勧れども然ーとて些の效もゐー。次の
日ハ人を央ぶて。山脚の里より殿酉師を迎ゑく。茶を徴め術と聿畏看病怠りるなのゐ。病
着ゐよく劇ーなりて。その夕より衰果ゐる。庚吉ハその暁ゐ忽然ーとて呼吸絶ーゐ小六が憾ハ
ゐ知りけん享年絶ゐ十六歳命數越ゐ盡る欲ぜハ又這次の巻ゐ解分るを聴かー。

開巻驚奇侠客傳第二集巻之二終